

シビルNPO連携プラットフォーム／since2014

CONTENTS

▼オピニオン

- ・「インフラ」と「お陰様」：岩橋公男
- ・インフラテクコンと人材育成：幸野茂

CNCP通信

VOL.91 / 2021.11.5

■今月の土木■



▼コラム

- ・分かり易い土木18 (道路) 昔のみち (道路の歴史)：大友正晴

▼レポート

- ・CNCP会員アンケート調査(その1)：横塚雅実

▼フレンズコーナー

- ・「右手にスコップ・左手に缶ビール」で地域を創る！：渡辺豊博

▼事務局通信



●地域協働で子どもたちが水遊びに興ずる清流を取り戻した源兵衛川



●1955年以前の源兵衛川の原風景

●1968年当時の汚れた源兵衛川

■「右手にスコップ・左手に缶ビール」で地域を創る
皆さん30年間にわたり「ドロ川」だった川が、ホタルが乱舞し、子どもたちが水遊びに興じ、歓声が響く「清流」に蘇った事実を信じられますか。この解決の処方箋はバラバラな市民・行政・企業を束ねたグラウンドワークの仕組みにあります。そのノウハウをご紹介します。(渡辺豊博)

▼フレンズコーナーに続く。

●今月のフレンズは、
土木学会インフラパートナー団体の仲間です。



インフラパートナー
JSCE 土木学会

▼オピニオン：インフラテクコンから広がる社会 「インフラ」と「お陰様」

佐藤工業株式会社 土木事業本部 副本部長

岩橋 公男



■ 1) 多摩川

私が小学生の頃（昭和40年代）、東京の多摩川は、「死の川」と呼ばれる程汚れていました。



昭和45年頃の多摩川丸子橋付近（白いのは主に洗剤の泡） 参照）NHK for school
https://www2.nhk.or.jp/school/movie/clip.cgi?das_id=D0005402342_00000

高度成長期に一気に人口が増え、団地が建ち並び、工場も集中して造られ、その排水が川に流され、魚は生息できず、浄水場も閉鎖されることになっていました。

しかし、現在の多摩川は、鮎が上るほどきれいな川になっています。



現在の多摩川丸子橋付近

では、なぜ多摩川はきれいになったのでしょうか。

それは、汚い水を多摩川に流さなくなったからです。つまり、下水道というインフラが整備されたからです。まさに土木の力ではないでしょうか。

■ 2) インフラへの感謝

下水道・上水道整備や、発電・送電整備は、我々市民の生活に大きく関わる大切なシステムです。

今でこそ当り前の生活は、インフラによって成り立っています。

それは、空から降ってきたわけではありません。

そこには、多くの人の努力と犠牲が伴っています。当り前は、実は、当り前ではないということをしっかりと市民が理解しているかという、残念ながらそうではないと思います。

我々市民は、今一度、そこに思いを馳せ、そして、そのことに感謝をしなければいけないのではないのでしょうか。

例えば、古来日本は、洪水で悩んできました。山と海が近い日本は、ひとたび雨が降ると平野は洪水に見舞われてしまいます。そこで、川の流れを変えたり（放水路）、堤防を造ったり、ダムを造って洪水から暮らしを守る努力をしてきました。

昨今の集中豪雨では、それでも洪水が発生してしまい、多くの被害が出ています。平野での安全な暮らしを維持するのであれば、まだまだダムを造る必要があります。しかし、今、ダムを造ろうとすると反対運動がおき、なかなか着工できないのが現実です。

今の暮らしが、過去に造られたダムのお陰であることを、再認識した上で賛成反対の議論をすべきではないか。

そこを抜きにして、「安全・安心・快適」を求めることは、片手落ちと言わざるを得ません。

電気がなければ生活がままならないこと、蛇口をひねればいつでもきれいな水が飲めること、生活の一つ一つを見つめたときに如何にインフラが大切であるかがわかるのかと思います。

■ 3) 高専生への期待

インフラは、我々の生活にとって必要不可欠のものであるわけですが、当り前のものとして普段はほとんど意識されるものでもなくなっています。そのことが、インフラに携わることへの憧れをなくし、インフラを支える人のなり手が少なくなっている原因の一つではないでしょうか。

「安全・安心・快適」な暮らしを維持・発展させて行くためには、インフラを守り、育てることが前提になるはずで、人も予算も減少していく中で、どうすれば良いのか。

その一つの答えが、インフラテクコンにはありました。地元の高専生が、その市民を巻き込み、自分たちのインフラを守っていくことを発信してくれています。

自分たちの暮らしがインフラという土台の上にあることを市民に意識してもらい、それを守っていくことを小さいけれど大きな力で育てていこう、という発想に大きな希望を感じます。

企業人にはない、自由で、活力のある柔軟な発想に大いに期待をします。

■ 4) さいごに

日本語には、『お陰様』というすばらしい言葉があります。

「陰」に『お』も『様』も付ける心を日本人は古来から持っています。

「インフラ」「土木」は、まさに市民の「安全・安心・快適」の“陰”に当たります。陰は、決して表に出る必要はありません。ひたすらに陰で支えています。多くの努力や犠牲とともに。

なぜ、それができるのか。それは、どこかで誰かが、「お陰様」と言ってくれている、それで充分なのです。その「お陰様」の声、最近では聞かれなくなっているのではないのでしょうか。

市民に今一度「お陰様」の心を取り戻したい、そんな想いをインフラテクコンに託し、未来永劫「安全・安心・快適」な暮らしが続くことを願わずにはおれません。



多摩川の汚染度変化と東京都の下水道普及率

出典) 国土交通省京浜河川工事事務所「多摩川について」

https://www.ktr.mlit.go.jp/ktr_content/content/000627905.pdf

にあります。これからのSDGsを基本としたCSVの時代においては、社員のサステイナブルな「エンゲージメント」や「モチベーション」の向上策が重要な鍵になると考えています。

弊社では、維持工事等に従事する社員の処遇改善のために、職務手当を支給する制度を導入し、業務改善のフォローを道路維持戦略室で行う等の取組を行っています。対外的には有料道路「白糸ハイランドウェイ」をマネジメントしていることをアピールし、ある意味メンテナンス従事者の地位向上を目指しています。ただし、いかなる現場でも管理責任があるという点では、維持工事も一般の工事もその責任の重大性や辛さには変わらないので、公平性から維持工事に偏った施策には限界がありますが…。

産側には、技術革新のみに注力せず、魅力ある業界づくりに果たしていく役割があると思います。

官としての役割

当社は、全国各地で直轄国道維持工事を担当しています。24時間365日の過酷さや、生産性の悪さから社員に人気がなく、社内的に立場が良くない時代もありましたが、積算基準の見直しなどの効果で、ここ数年収支が改善してきています。当然ながら、儲かったことは一番の成功体験にもつながり、担当者のモチベーションの向上にも寄与しています。

府中市や三条市に代表される包括維持管理の流れは、PBMCを基盤とする企業の裁量をインセンティブとすることで、企業側および担当者のモチベーション維持や受注意欲の向上に繋がると考えます。

建設業界は、特に有事においては一番のエッセンシャルワーカーでありながら、日常を影ながら支えていることはあまり知られていません。山崎エリナ氏が写真家の目線から、建設業が当たり前前の日常を影ながら支えている様子を切り取り紹介してくれていますが、官側にはインフラメンテナンス従事者の地位向上につながるような施策を期待します。

学としての役割

例えばスポーツの分野でも、オリンピックなどで国際的に戦うためのアスリート強化には、競技人口を増やし、裾野を広げることが重要です。裾野を広げるためには、次世代を担う若者たちが「興味」や「関心」および「競争心」を抱き、「わくわく感」や「インセンティブ」を感じられることが鍵だと、今回のインフラテクコンを通じて感じたところです。画一化を是とする今の教育現場にあっては、一番欠けている部分かもしれませんが、大学や高専等の高等教育現場においては、実現可能な領域だと思います。

同様のことが、現在の土木工学の教育現場でもあるように思われます。まず第一に、未だにインフラメンテナンス工学という学問が存在しないということ、インフラテクコンのテーマに対してインフラの課題を学生たちが十分には認識していなかったことです。

個人的主観ですが、インフラメンテナンスとは、インフラ経営から点検技術、補修技術、各種工学分野（ここがやっかい）、日常点検・補修作業、現場マネジメントを総合して横串を指すことだと考えています。生意気なことをいうようですが、縦割りの弊害がこういう部分にも現れているのかもしれない。

インフラテクコンをふり返って

高専の志望動機に、「ロボコンに出たいから高専に入った」というものもあるそうです。今回、当社がテクコンに協賛した動機のひとつも、優秀な人材が欲しいからですが、動機付けはどうあれ、人材を安定的に確保しサステイナブルなメンテナンスを実現するための、重要なサイクルのひとつの好事例になったと、確信しております。今年のインフラメンテナンス大賞の、有力候補ではないでしょうか。

まとまらない稚拙な文章でたいへん申し訳ありませんでした。現場のことしか知らない人間の戯言と、一笑に付してください。



▼コラム

わかり易い土木 第18回 道路の話 1
昔のみち（道路の歴史）

アジア航測株式会社 事業推進本部 社会インフラマネジメント事業部

大友 正晴



土木の中で、我々のもっとも身近にある道路、「みち」について6回にわたりあれこれご紹介したいと思います。

はじめに

道路は、人類始まって以来一番身近にある土木施設、インフラです。その道路、「みち」について私の経験を踏まえてご紹介させていただきます。今回のシリーズで、「土木」へのご理解を少しでも得られれば幸いです。

先ずは道路の歴史からです。

■ 「みち」「道路」とは

みち：陸や海で人が通る所（広辞林より）

道路：人・車・牛馬などが、ある地点からある地点まで行けるように、人間が作った地上の通路、
とおりみち。みち。（広辞林より）

辞書によると人が通るところを「みち」あるいは「道路」と言うことになります。しかしその起源は、「けものみち」と言われるような動物が通ってできた道同様に、人が通ることのできたのが道の始まりです。つまり、人がある目的・行きたいところに行くためにできたのが道路です。

理屈をこねると面倒ですが、要は人・車の通る空間が道路です。

■ 古代の道

前述の定義でもあるように人が通る所に道はできました。文明が進むと人の往来や物を運ぶことが頻繁となります。そのための道路も整えられるようになります。

日本では、飛鳥時代、奈良時代になりますと舟運とともに駅路と呼ばれる街道ができます。律令では、五畿七道と言う広域行政単位が定められました。五畿とは山城・大和・河内・和泉・摂津の五か国をさし、古代の首都圏にあたります。その中心にあたる大和の国では、上ツ道・中ツ道・下ツ道、横大路、山田道、山辺の道、龍田道などの古道が整備された記録が残っています。七道とは駅路によって区分される行政区域のことで、駅伝制によって諸国を連絡することで区分されています。お分かりのように駅伝競走の駅伝の語源はここから来ています。

七道には、東海道、東山道、北陸道、山陰道、山陽道、南海道、西海道がありました（後に北海道を入れて八道ともいわれます）。現代でもこれらの呼び方には馴染みがありますし、北海道は今でも残っています。

駅路の幅員は、6-12m だったそうでかなりの広幅員です。

◆ 昔の道は災害に強い

2011年の東日本大震災において東北から関東にかけての沿岸では津波により大きな被害がありました。しかし、かつての街道など古道では、津波被害を受けなかったことが分かっています。

道以外でも、神社、お寺、墓地など古くからあるところは、災害をうけにくい場所に立地している事が多くみられます。

先人の経験と教えの確かさに、今更ながら感動を覚えます。

■ 中世から江戸時代の道

中世になると鎌倉街道、武田信玄の棒道など軍事目的の道路も造られるようになりました。鎌倉街道の幅員は、馬二頭が並んで通れる約2mとの説もありましたが、実際の発掘調査等から3-12mぐらいだそうです。中には3間（約6.5m）の道幅の両脇に、同じく3間幅の土手を設けた構造を持つ鎌倉街道もあったようです。

江戸時代の五街道（東海道、中山道、甲州街道、奥州街道、日光街道）は、どなたでも学校で教わり、ご存じだと思います。江戸幕府は、慶長9年（1604年）に全国的に道路改修事業を起こし、道幅の確保、道路の屈曲の改修、牛馬の往来に支障をきたさぬように小石の除去などを命じました。また、松、杉などの並木、一里塚の整備を行ったようです。さらに元和2年（1616年）に没した家康の遺訓「家康百箇条」が示され道路の種類・等級に関する記載があったそうです。当時の道路の種類と幅員は右表のように定められていました。

東海道は大海道なので、6間となりますが実際には2~3間ほどだったようです。6間もあるのは宿場内など限られた場所のみと思われれます。

大海道	6間（約10.8m）
小海道	3間（約5.4m）
横道	2間（約3.6m）
馬道	2間（約3.6m）
歩行路	1間（約1.8m）
捷路	3尺（約0.9m）
作業道	3尺（約0.9m）

■ 明治以降

明治9年（1876年）には、太政官通達で重要度によって国道（1~3等）、県道、里道が制定されました。明治18年（1898年）には、44の路線を国道として認定し、幅員は7間（約12.7m）と定められました。

大正8年（1919年）、初めて道路法が制定され、明治期の路線は廃止され、新たに64の路線が国道として定められました。これを大正国道と言うそうです。

戦時中の昭和18年（1943年）には、「全国自動車国道計画」が立案されましたが建設には至りませんでした。しかし、これが戦後の高速道路網の基礎となる弾丸道路構想と言われたもので、現在我々が利用する高速道路とほぼ同じルートでした。

■ 戦後の道路整備

第二次世界大戦後の戦後復興のため道路の維持修繕・復旧が始まりました。昭和29年（1954年）には第一次道路整備5カ年計画が策定され、以降も道路整備計画が策定実行され現在も新道路整備5カ年計画に基づき道路整備が行われています。昭和39年（1964年）の東京オリンピック開催を契機に、名神・東名高速道路や首都高速道路が建設・供用開始され日本の高速道路網の構築が始まりました。戦中の弾丸道路網の計画がようやく実現を見るようになりました。高速道路網は、経済活動、災害時の救済などに大きく貢献しています。

経済の発展とともにモータリゼーションも急拡大しました。同時に、道路整備も飛躍的に進んで整備延長も大きく伸ばしてきました。

昭和30年代の頃の道路と言うと、未舗装で雨が降るとあちこちに水溜まりやぬかるみがありました。車が通るたびに傘を車の方に向けて水しぶきを避けたという記憶があります。駅周辺の道路であっても砂利道で、穴ぼこだらけの道路をバスが大きくうねりながら通る姿は今でも目に焼き着いています。

この頃からアスファルトによる舗装も急速に進みました。今では、舗装していない道路を探すのも難しいほど、私たちの廻りの道路はほとんど舗装されています。お年寄りの方は皆さん、こんな路地も舗装されていると驚かれたと思います。

◆道路の泥濘る（ぬかる）み

泥濘るとは、雨や雪どけなどで地面が柔らかくなる。どろどろになる状態を言います。

今どきの若い方には、道路が泥濘るなんて理解できないと思います。筆者の子供の頃は、雨が降ると泥濘るみを避けて歩くことは当たり前でした。でも、新しい長靴を買ってもらった時などは、じゃぶじゃぶ水溜まりや泥濘るみに入ったりして遊んだりもしました。

▼CNCP レポート

CNCP 会員アンケート調査(その 1)

シビルNPO 連携プラットフォーム 常務理事/会員支援事業担当
社会基盤ライフサイクルマネジメント研究会 副理事長

横塚 雅実



今回から2回にわたって、会員支援事業の一環として本年7月から8月にかけて実施した「会員アンケート調査」の結果についてご紹介します。まず第1回目は選択式で回答をいただいた結果を報告します。次号の第2回目は自由記入形式でいただいたご意見と、それに対する事務局の対応や考え方をご紹介します。

■調査の目的

CNCPは、設立以来、中間支援組織としての活動のあり方を常に模索しつつ、現在は「土木と市民社会をつなぐ」ことをキーワードとして、事業を組み立てています。一方、運営体制は当初の枠組からほとんど変わりなく継続してきましたが、活動の活性化のために世代交代が必要とされてきました。

経営会議では「R3年度からの新しい体制と活動の方針」を検討し、R3年度の理事会と総会で承認され、これをひとつずつ具体化する活動を進めています。その中でCNCPの活動の基盤となる会員の実情とその意向を、確実に把握することが必要となってきました。

本アンケートは会員に対するCNCPのサービス向上を主たる目的として、会員の現在の意向や具体的なニーズについて何うアンケートを実施しました。

■アンケート調査の概要

2021年3月末現在の「CNCP会員名簿」を基礎に、下記についての意向をアンケート形式の設問に回答していただく調査を行いました。

- ①CNCPが提供する支援やサービスについて
- ②会員の関与するあるいは関心のある社会貢献活動について
- ③CSVに関する関心について

■アンケート調査結果

アンケート形式	メールにアンケートファイル（EXCEL）を添付し配布・回収
アンケートの実施期間	2021年7月24日～8月2日
アンケート送付会員	80件
回答会員	18件（22.5%）

① 回答率

会員種別ごとの回答会員数、回答率は表-1のとおりです。昨年、実施したサポーターアンケート調査の回答率22%と同程度でした。

表-1 会員アンケートの回収状況

回答概要	(団体、%)		
種別	回答会員	会員総数	回答率
法人正会員	4	19	21%
個人正会員	9	32	28%
賛助会員(ゼネコン)	3	12	25%
賛助会員(コンサル他)	2	17	12%
合計	18	80	23%

② 設問Ⅰ CNCP の提供する支援やサービスについて

下記の9つのサービスについて、以下2つの問いに「はい」か「いいえ」かで質問しました。

- ・必要性がこれまでにあったか
- ・必要性が生じる場合 CNCP を利用するか

また、CNCP を利用しない場合、それはどのような理由か自由記入で尋ねましたが、これについては次回報告します。

1) 中立で半公的な集まれる場	6) 会議室・WEB 会議機器
2) 法人格と公的立場	7) 会員・サポーターとの相談
3) 銀行口座を開き資金管理	8) 活動資金の貸付
4) 専門的な人的ネットワーク	9) NPO 運営のノウハウ
5) 情報の発信ツール (CNCP 通信/HP・Facebook 等)	

設問Ⅰの結果は図-1、図-2の通りです。両者を比較すると、いずれのサービスについても、これまで必要性は無かったが、今後はCNCPを利用してみたいという傾向にありました。

サービス1)~9)を個別にみると、これまでに必要性があったサービスとしては「4)専門的な人的ネットワーク」、「6)会議室・WEB 会議機器」が比較的多いようです。一方、必要性が生じた場合CNCPを利用するサービスとしては前記の他に、「1)中立で半公的な集まれる場」、「2)法人格と公的立場」などが多くみられます。またこの両者は特にその差が大きく、これまで必要性は低かったが、必要となった場合は大いに期待していると言えます。

一方、「3)銀行口座を開き資金管理を支援するサービス」は余り期待されていないようです。

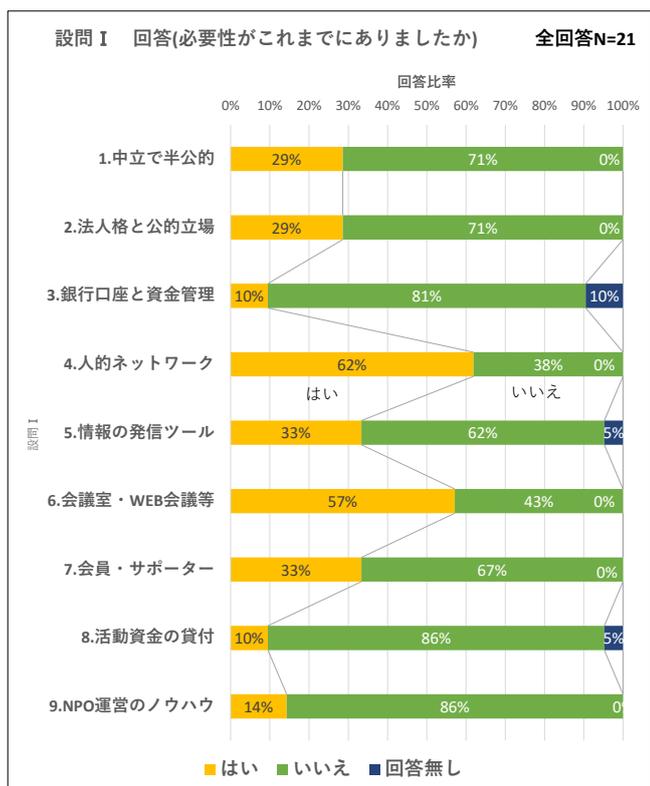


図-1 提供する支援やサービスの必要性(過去)

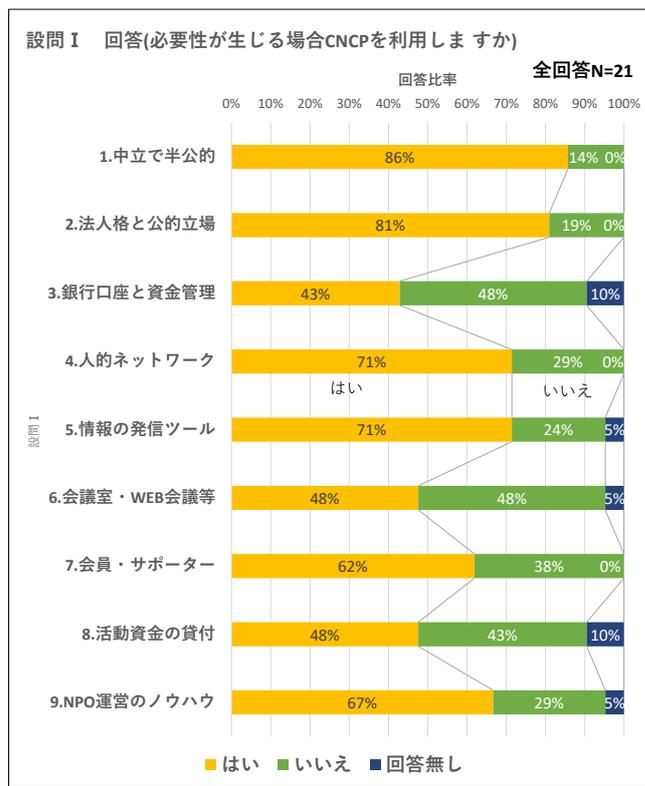


図-2 提供する支援やサービスの必要性(将来)

これを正会員、賛助会員に分けて比較してみました。設問に対し「はい」と答える傾向は正会員の場合、ほぼ上の図の全体の傾向と同様ですが、賛助会員のそれは大きく傾向が異なっていました。

これは、賛助会員には母体となる企業があるので、人的ネットワークなど以外はこれまでサービスの必要性が低かったことを示しているようです。一方、今後そのような必要性が生じる場合、取り組む活動の特性を考えると、やはりCNCPのサービスを活用する可能性を見込んだものと思われます。

同様に正会員を法人、個人で区分して比較したものを図-3、図-4 に示します。「4) 人的ネットワーク」から「7) 会員・サポーターへの相談」まで、法人会員の方がこれまでに必要性を感じていた比率が大きいようです。また今後必要性が生じる場合、法人、個人両者はほぼ同程度にCNCPの活用を期待していますが、細かく見ると「3) 銀行口座・資金管理」、および「8) 活動資金の貸付」に対する必要性は法人会員の方が、比率が大きい結果となりました。

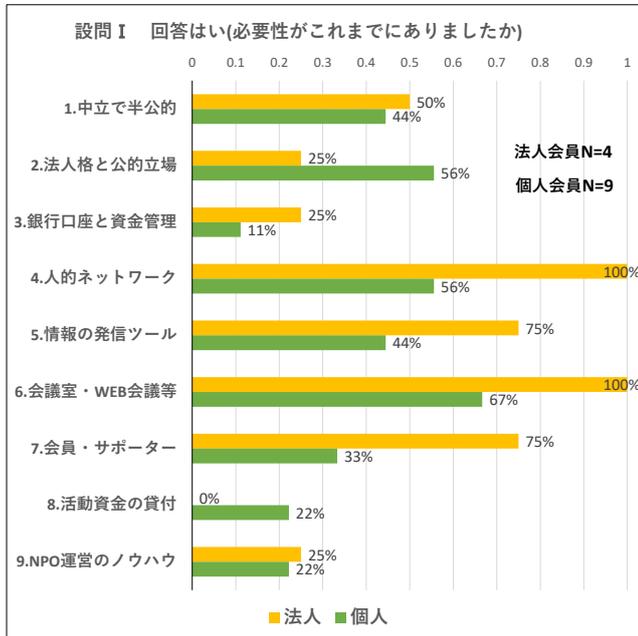


図-3 正会員種別ごとの支援やサービスの必要性(過去)

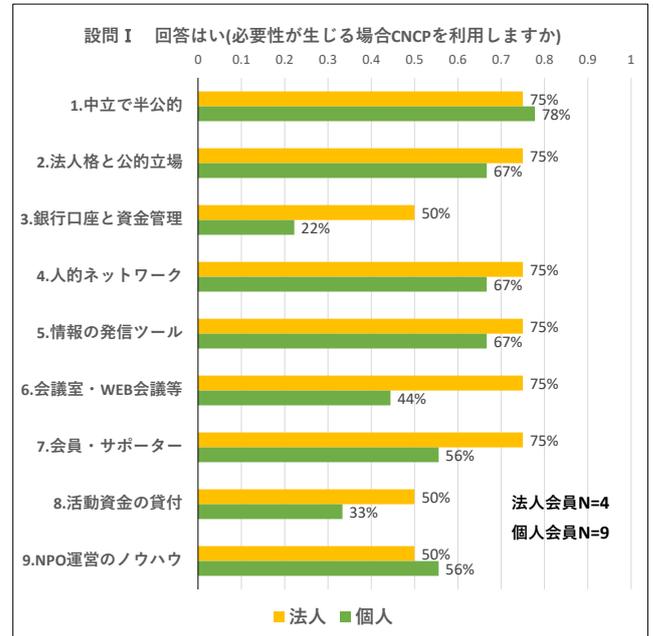


図-4 正会員種別ごとの支援やサービスの必要性(将来)

③ 設問Ⅱ 会員の関与するあるいは関心のある社会貢献活動

会員が新たに取り組みたい社会貢献活動があるか、またその場合、CNCP にどのようなことを期待するか、更に、CNCP 通信やサロンはそのような関心に役立っているかなどを尋ねました。その結果は図-5 のとおりです。

会員の約半数以上が、新たに取り組みたい社会貢献活動を持っています。また4割程度は他団体との連携を望んでいます。一方、間接的に支援してみたい社会貢献活動があるとの応えは3割弱でした。いま取り組んでいる活動で手一杯ということかもしれません。

CNCP 通信やサロンの役立ちについては、8割前後が好意的な回答を示しています。取組のヒントを得たいという意向はもちろん、むしろ楽しみたいという気持ちも会員には多いようです。

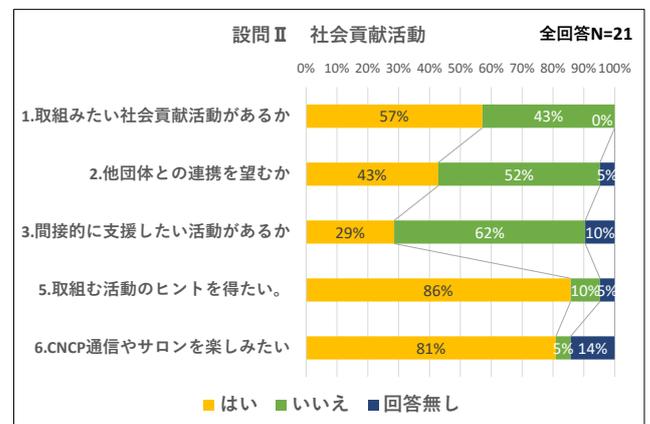


図-5 関与あるいは関心のある社会貢献活動

④ 設問Ⅲ CSVに関する関心について

賛助会員(29社)のCSVに関する関心を「CSV研究会」に参加する会員以外の賛助会員(24社)に尋ねてみました。残念ながら4社だけからの回答で、十分な傾向分析はできませんでした。

CSV研究会の会員も含めると、賛助会員の約3割がCSVに関して関心を持っているようです。回答した本人はもとより幹部もCSVに対する関心があるようでした。しかし、実際の活動にはまだ十分に至っていない様子で、今後、活動が進んでいくような場合、支援が必要と予想される内容は、法制度などの規制緩和に関する要請、実証実験などへのスタートアップ支援、次いで事業が普及していく段階での人材育成が見込まれているようでした。

▼フレンズコーナー

「右手にスコップ・左手に缶ビール」で地域を創る！
～地域協働で「水の都・三島」の環境資源を再生～

NPO法人グラウンドワーク三島専務理事
渡辺 豊博



取り組みの概要

グラウンドワーク三島は、1992年から29年間にわたり、複雑に絡み合った困難な地域課題を解決すべく、バラバラに活動して利害が対立する市民・行政・企間の調整・仲介役となり、共存共栄の新たな「地域協働」の仕組みづくりと、具体的な「現場モデル」を実践・蓄積してきました。

この「課題解決力」の源泉は、本会に参画する20の市民団体が一体化した「市民ネットワーク」の力であり、その多種多様な市民力・地域力を束ねる中間支援組織としての「コーディネート・マネジメント」の力です。

活動の成果は、ドブ川と化していた「源兵衛川」を、ホタルが乱舞し、子どもたちが水遊びに興ずる水辺空間に創り上げたり、環境悪化の進行により消滅した、水中花・三島梅花藻の増殖基地である「三島梅花藻の里」を造成して復活させたことです。

また、歴史的な井戸や水神さん、市内の幼稚園・小中学校を対象とした「環境出前講座」の開校、市内4校での学校ビオトープの造成による環境教育活動など、三島市内を中心として70箇所において、市民力と地域力、現場力を結集した、多様な環境改善活動を実践してきました。

これらグラウンドワーク三島の活動実績は、地域協働のまちづくりの先進的なモデルとして、国内外から高い評価を受け、毎年約1,500人・約100団体が視察や研修に訪れており、三島の現場モデルが全国モデル・成功モデルとして、他地域に波及しています。



●アクションで現場を創る

社会的ニーズへの対応
環境資源の危機的状態が活動の起爆剤

- ① 変わり果てた『水の都・三島』の水辺自然環境
- ② バラバラな市民・NPO・行政・企業
- ③ 難しいパートナーシップの構築

↓

イギリスで始まったグラウンドワーク手法を導入、実践

- ・ 仲介型NPO「グラウンドワーク三島」の結成
- ・ 水辺自然環境の再生、原風景・原体験の復活
- ・ パートナーシップの有益性と発展性を実証
- ・ 「NPOの特性」をフル動員
自由度、迅速性、行動力、独創性、先駆性、柔軟性、多彩性、汎用性、社会的波及効果、教育的波及効果

●環境資源の危機が原動力

グラウンドワーク三島の役割

- ・ **市民**・・・現場で汗を流す
市民力・地域力を結集
- ・ **企業**・・・協力する
専門性を発揮、資機材提供
- ・ **行政**・・・支援する
資金援助・制度的支援・物的支援
- ・ **グラウンドワーク三島**・・・調整・仲介する
中立的・専門的な支援と役割

グラウンドワーク三島

●段取り・調整が役割

代表的なプロジェクト

①源兵衛川エコロジーアップ活動

源兵衛川は、中心市街地に位置する全長 1.5km の農業用水路・都市河川です。1960 年代半ばから深刻な環境悪化が進行しましたが、1990 年以降、市民による年間 40 回以上の継続的な清掃活動と住民参加による親水公園化事業の計画づくり、農林水産省の水環境整備事業の導入などの総合的な取り組みにより、中心市街地に豊かな水辺自然空間の原風景と水と触れあえる潤い場が復活し、観光スポットになっています。

本会は、源兵衛川の「環境モニタリング調査」を行い、水辺環境の経年的な生息状況の把握と外来種の除去、在来種の導入による希少種の生息環境の再生活動を実施しています。また、ホトケドジョウやゲンジボタル、カワセミが生息できる水辺環境の整備を図り、源兵衛川から消滅したミシマバイカモを、増殖基地である「三島梅花藻の里」から源兵衛川に移植させ、多種多様な生き物が生息できる自然度の高い川を創り上げてきました。

さらに、川の維持管理を担う人材育成に取り組み、2004 年から「リバーインストラクター養成塾」を開講し、延べ 200 人の「案内人」を育成しています。



●ホタルが舞う清流が復活

絶滅危惧種・ミシマバイカモを復活



●「環境のバロメーター」が再生

②松毛川千年の森づくり活動

松毛川は、源兵衛川の最下流域に位置する、狩野川流域に唯一残された 6ha の旧河川敷・止水域です。両岸には、狩野川の原風景であるエノキ、ムクノキ、ケヤキなど約 1,300 本の樹木からなる河畔林が広がり、樹齢 100 年以上の巨木が 130 本以上も残存する、全国的にみても貴重な「ふるさとの森」です。

しかし、土地所有者の高齢化と農地・森林の管理放棄により、河畔林周辺は繁茂した放置竹林に覆われ、風雨や老木化による倒木や枯死も発生して、大切な「ふるさとの森」が消滅の危機に瀕していました。

そこで本会では、松毛川を「千年の森」と位置付け、2003 年から地域協働による環境改善活動を実施してきました。これまでに河畔約 2.4km に及び竹林伐採や潜在自然植生の苗木 6,000 本以上の植樹、外来種ホテイアオイの駆逐、2t トラック数百台分以上のゴミの除去、「松毛三日月会」などの地元愛護会の結成、自然観察会の開催、大学生の現場体験や企業の CSR 活動の場として活用、県による「地域用水環境整備事業」の導入・提案を進めてきました。



●狩野川の旧河川敷と河畔林



放置竹林に覆われた河畔



放置竹林伐採作業



放置竹林伐採後の河畔林(ご神木現る)

●森づくりのプロセスと成果

活動への参加者は年間延べ 500 人にも及び、経費は毎年 200 万円程度を助成金や補助金を活用して投入しています。

現在、「地域用水環境整備事業」が 2019 年に県営事業として事業化され、浚渫工事と環境整備工事が実施されることになりました。また、本会の「松毛川千年の森づくりトラスト運動」により、三島市側の河畔林約 3,000 m²の土地買収も実現しました。この 18 年間にわたる、ノコギリとゴミ袋を持った地道な活動が、松毛川の環境保全と景観形成、地域環境と共存した森づくりへと成果を蓄積してきました。

③境川・清住緑地再生活動

境川は、三島市と駿東郡清水町の境を流れる一級河川です。中流部の左岸に位置する「境川・清住緑地」は、市街地の中にありながら豊かな樹林帯や多数の湧水池、水田が点在する約 8,500 m²の谷地田です。

1995 年から 2000 年の間、本会が遊水池の環境整備計画の調整・策定を担い、原自然を活かしたビオトープを造成しました。完成後は、「境川・清住緑地愛護会」が設立され、市民主体の維持管理を担い、原風景である低湿地の自然が保全・維持され、多様な動植物が生息するとともに、稲作体験など、隣接の三島市立西小学校の「環境教育園」として、年間 10 回以上も活用されています。

2015 年には、南隣に位置する、湧水を水源とする複数のコンクリート池が点在する養魚場跡地約 3,000 m²を、本会の提案と調整により、民間企業から三島市が買収し、ビオトープの拡大を実現させました。

また、本会は、自然環境調査や計画案策定のワークショップ、ワンデイチャレンジなどを実施し、「ミチゲーション（生態系の強化）工法」の実施、市民主体の維持管理体制の構築を進めてきました。

その結果、2020 年 8 月に境川・清住緑地が拡大され、富士山からの湧水が噴出する「水柱」が見学できる湧水公園が整備・完成しました。公園内には自然水路を造成し、ミシマバイカモを移植し、現在、定着して白い花を可憐に水中で咲かせています。



●境川・清住緑地のビオトープ



●田んぼの学校



元養魚場の湧水地が埋立
消滅の危機



ミチゲーション工事



復活した湧水の水柱

●改変・破壊された湧水地をミチゲーション工法で再生



●せせらぎ環境案内処

今後の展開

今後、市内を流れる川沿いの空き家を活用した水辺のレストランやカフェ、憩いの空間形成とともに、白滝公園・桜川・御殿川・三島梅花藻の里・源兵衛川をつなぐ、新たな街歩きの回遊路を設定して「水の都・三島」の魅力の多彩化を図り、三島の賑わいの強化を進め、環境資源を地域資源に活用した「湧水網都市」をさらに発展・強化していきます。

●私たちは、土木学会インフラ
パートナー団体の仲間です。



CNCPは、
あなたが参加し、
楽しく議論し、
活動する場です！

お問い合わせは下記まで

特定非営利活動法人
シビルNPO
連携プラット
フォーム

●登録事務所
〒101-0054
東京都千代田区神田錦町
3丁目13番地7
名古屋ビル本館2階
コム・ブレイン内
●連絡事務所
〒110-0004
東京都台東区下谷
1丁目11番15号
ソレイユ入谷

事務局長 田中努：
cncp.office@gmail.com
ホームページ URL：
<http://npo-cnnp.org/>

▼事務局通信

■10月の実績

●令和3年度通常総会

開催日・場所：10月5日（火）Zoom会議
議題：①R2年度事業報告・決算報告、②R3年度
事業計画、③定款の変更

●第91回経営会議

開催日・場所：10月12日（火）Zoom会議
議題：3事業の推進計画の具体化

■11月の予定

●第92回経営会議

開催日・場所：11月9日（火）Zoom会議
議題：①ファンドの検討、②3事業の推進計画

■現在の会員数

賛助会員29／法人正会員13／個人正会員30／合計72
／サポーター125

●CNCPの活動には下記の賛助会員の皆さまのご支援をいただ
いています（50音順・株式会社等省略）。

アイ・エス・エス／アイセイ／安藤・間／エイト日本技術開発
／エヌシーイー／奥村組／オリエンタルコンサルタンツ／ガイ
アート／熊谷組／建設技術研究所／五洋建設／シンワ技研コン
サルタント／スバル興業／セリオス／第一復建／竹中土木／鉄
建建設／東亜建設工業／東急建設／ドーコン／飛鳥建設／土木
学会／西松建設／日本工営／パシフィックコンサルタンツ／フ
ジタ／復建エンジニアリング／復建調査設計／前田建設工業
（以上29社）

